



「マスコミが報道しない辺野古新基地建設問題～ことばを奪われるということ～」

問題提起者：喜屋武 幸（きゃん みゆき）さん

元中学校教師（学校は辺野古にあります）、現在：スクールカウンセラー、大学非常勤講師

日時：2023年7月22日（土）13:30～16:30

参加費：無料

会場：Zoom を使用したオンライン

参加者：7名

問題提起要旨：教師生活最後の3年間を辺野古にある久辺（クベ）中学校で勤務していました。

学校は名護市の市街地から山を越えた東側の辺野古にあり、20年余りにわたって米軍普天間飛行場の移設地として紛糾し、現在、海の埋め立て工事が行われています。この間、辺野古新基地建設に反対する市民団体が、キャンプ・シュワープのゲート前で座り込みの抗議活動をしています。

辺野古新基地建設問題は、沖縄県と日本政府との裁判闘争など、日本政府と沖縄県の対立が続いていますが、辺野古においても、住民は「容認」派、「反対」派と分断されています。さらに漁師の漁業権放棄で、総額30億円、一人当たり最大3000万円の補償金が支払われ、辺野古では補償金をもらった住民とそうでない住民が登場するようになりました。そして地域では、次第に基地建設を話題にしなくなり、ことばを奪われ、生きづらさを感じるようになっていきます。

そのような環境の中で、子どもたちは生まれ、成長し中学生となったのです。ことばを奪われるということが、子どもの教育にどんな影響を与えているのか、子どもの学ぶ権利は保障されているのか、学校はこの問題にどのように対応しているのか、学校への圧力、教師の苦悩など、マスコミが報道しない辺野古問題実情を報告します。